ふるさと歴史アラカルト

君の名は

朝鮮通信使は、室町時代から江戸時代にかけて朝鮮国王が日本国に派遣した外交使節団のことです。「通信」とは「信を通わす」という意味で、江戸時代には12回派遣されました。通信使の目的は、主に江戸幕府の将軍徳川家の代替わりを祝うことであり、江戸では国書（外交上の書簡）の交換が行われました。一方で400～500人で構成される通信使一行の中には、朝鮮王朝を代表する学者や医者、書家や画家などがいたことから、通信使の立ち寄った各地では、文化交流も行われていました。現在の山口県では下関と上関に寄港しており、今回はその中から一人の少女についての話を紹介します。

享保4（1719）年、上関で通信使と交流した岩国領の人々の中に「粟屋氏女子」と記された人物がいます。彼女は岩国領の粟屋家に生まれ、11、2歳の時、師である岩国領の儒学者戸川整斎とともに通信使と交流しました。彼女の書を見た通信使の申維翰は、字は柔らかく倒れた蛇のようだが、幼い少女がこれだけ書けるのは珍しいことだ、と著書の『海游録』の中で記しています。また成夢良も整斎へ贈った文の中で、彼女の書について触れています。通信使の目に映った当時の日本社会の中で、幼い少女の書が特に印象的であったことがうかがえます。

彼女の号が文蘭であったことは資料で確認できますが、岩国領に粟屋家は約10軒あり、どの粟屋家の誰なのかを特定できる資料はありません。その中で、粟屋又兵衛の娘おふさが文蘭ではないかとの説があります。おふさは正理院（※1）に59年仕えて老女（※2）にまで出世し、正理院死去の折には見届けも許された人物です。またおふさの功績によって粟屋家は石高を加増されており、功績や当時の年齢からおふさが文蘭だったのではないかと考えられています。

なお現在、文蘭の話は韓国の通信使の絵本でも取り上げられています。岩国の少女が、歴史的に重要な文化交流を現在に伝える役割を果たしていることは、大変興味深いことです。

写真：『字体鑑』…戸川整斎が草書や楷書などさまざまな字体を書いたものに対し、成夢良が贈った文。粟屋氏の娘のことにも触れている。

※1　6代岩国領主吉川経永の母

※2　御裏（領主夫人の居所）に勤める女性の中で最も高い役職

12月19日(日)まで企画展「朝鮮通信使と岩国」を開催しています。

岩国徴古館

昭和20年に旧岩国藩主吉川家によって建てられ、その後岩国市に移管された市立の博物館

住所：横山二丁目7－19　☎(41)0452

休館日：月曜（祝日の場合はその翌日）

岩国市　人口・世帯

人口	130,632人【前月比 －75人】	男性　62,235人	女性　68,397人
世帯	65,540世帯【前月比 －14世帯】	※外国人人口を含む（2021年11月1日現在）	

交通事故発生件数

10月分事故件数　20件（175件）　死者数　0人（5人）　傷者数　22人（205人）

※高速道路発生分を除く。（　　）内は2021年累計

目の不自由な人へ

「広報いわくに」のカセットテープをお貸しします。

お問い合わせは、広報戦略課☎(29)5016 FAX(21)3337